

令和7年度（第64回）農林水産祭
第41回「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」

【海と山の絆で苦難を超えて 次世代にしなやかにつなぐ】

—業績発表及びディスカッションの内容—

開催日時 令和8年2月6日（金）13時30分～16時00分
場所 宮城県仙台市 ホテルモントレ仙台 3階 翠鳴館
主催 農林水産省・公益財団法人 日本農林漁業振興会



令和8年4月

公益財団法人 日本農林漁業振興会

発行にあたって

農林水産祭事業は、農林水産祭参加表彰行事において農林水産大臣賞を受賞された方の中から特に優秀な農林水産業者を選び、その業績を顕彰し、業績内容について広く普及を図ることを目的の一つとしています。

このシンポジウムは、農林水産祭事業の一環として、去る令和8年2月6日（金）宮城県仙台市のホテルモントレ仙台において『海と山の絆で苦難を超えて 次世代にしなやかにつなぐ』をテーマに、平成7年度農林水産祭むらづくり部門の天皇杯受賞者である宮城県本吉郡南三陸町の「入谷の里山活性化協議会」の業績を取り上げて、約120名の皆様の参加の下、開催しました。

（オンラインでの配信も併せて行い約80名の方にご視聴頂きました。）

本書は、「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」の業績発表、意見交換（ディスカッション）等の内容を一冊に取りまとめたものであり、これらの内容が普及し活用されて、今後の我が国農林水産業の振興発展に寄与することを願うものです。

最後に、今回開催にあたり、多大なるご支援とご協力をいただきました関係各位に対し、深甚なる謝意を表する次第です。

令和8年4月

公益財団法人 日本農林漁業振興会

令和7年度（第64回）農林水産祭
（第41回）「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」

目 次

シンポジウムスケジュール	1
シンポジウム出席者	2
受賞者の業績概要	3
シンポジウムの記録	5

令和7年度（第64回）農林水産祭

「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」（トップリーダー発表会）

【海と山の絆で苦難を超えて 次世代にしなやかにつなぐ】

《スケジュール》

13:30~16:00

(敬称略)

- | | | | |
|---|-------------|---|------------------------|
| 1 | 開 会 (13:30) | 公益財団法人 日本農林漁業振興会 常務理事 | 小栗 邦夫 |
| 2 | 挨拶 | 農林水産省東北農政局長
宮城県知事
南三陸町長 | 永井 春信
村井 嘉浩
千葉 啓 |
| 3 | 選賞審査報告 | 農林水産祭中央審査委員会むらづくり分科会主査
(明治大学農学部専任教授) | 市田 知子 |
| 4 | 業績発表 | 令和7年度むらづくり部門天皇杯受賞
入谷の里山活性化協議会事務局長 | 阿部 忠義 |

・・・休憩 (14:30~14:40) ・・・

- 5 ディスカッション (14:40)
(登壇者)
- ・コーディネーター
市田 知子 (3に同じ)
 - ・令和7年度むらづくり部門天皇杯受賞
阿部 國博 (入谷の里山活性化協議会会長)
阿部 博之 (" 副会長)
 - ・コメンテーター
小谷 あゆみ (農林水産祭中央審査委員会むらづくり分科会委員 (農ジャーナリスト))
山内 明美 (宮城教育大学教育学部准教授)
長田 恵理子 (農林水産省東北農政局宮城県拠点地方参事官)

(内容)

- ・意見交換、質疑応答
- ・総括

- 6 閉 会 (16:00)

第41回「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」出席者

R8. 2. 6 (敬称略)

区 分	氏 名	所 属 ・ 職 名 等
業績発表者	阿部 忠義	令和7年度農林水産祭むらづくり部門天皇杯受賞 入谷の里山活性化協議会 事務局長
コーディネーター 及び選賞審査報告	市田 知子	農林水産祭中央審査委員会むらづくり分科会主査 (明治大学農学部専任教授)
パネルディスカッション パネリスト	阿部 國博	令和7年度農林水産祭むらづくり部門天皇杯受賞 入谷の里山活性化協議会 会長
	阿部 博之	同 副会長
コメンテーター	小谷 あゆみ	農林水産祭中央審査委員会むらづくり分科会委員 (農ジャーナリスト)
コメンテーター	山内 明美	宮城教育大学教育学部准教授
コメンテーター	長田 恵理子	東北農政局宮城県拠点地方参事官
挨拶	永井 春信	農林水産省東北農政局長
	村井 嘉浩 (代読：石川 佳洋)	宮城県知事 (農政部長)
	千葉 啓 (代読：三浦 浩)	南三陸町長 (南三陸町副町長)
司会・進行	小栗 邦夫	(公財) 日本農林漁業振興会常務理事

むらづくり部門

出品財 むらづくり活動

入谷の里山活性化協議会
(代表 阿部 國博)

宮城県本吉郡南三陸町



1 地域の概要

南三陸町は、宮城県の北東部に位置し、東は太平洋に面し、三方を標高300～500mの山々に囲まれている。入谷地区は町内約12,000人の人口の中で2,000人弱が暮らす農村地区で、美しい里山の景観と豊かな森や田畑が広がっている。東日本大震災前から、地域にある自然の恵みや伝統文化を生かした学びの場の提供や交流促進を図り、農作業体験・モノづくり体験・調理体験などの体験プログラムの開発なども含め、グリーン・ツーリズムにも力を入れている。コロナ禍で迎えた震災から10年という節目の令和3年に「このまま応援しているだけではせっかく震災前から頑張ってきた入谷地区の取組が継承されなくなってしまう」と地域の中心にいた住民たちが若者を中心とした人材育成や新たな事業創出などに動き出し、当協議会が発足した。

2 むらづくり組織の概要

構成員として、入谷地区の「食・体験・宿泊」を担うことができる各種施設の団体が加盟しており、「南三陸まなびの里いりやど」、「ひころの里コンソーシアム」、「南三陸農工房」、「校舎の宿さんさん館」、「南三陸 YES 工房」、「入谷サン直売所」の6団体が主な構成員である。下は20代、上は70代と幅広い年齢層で、地元出身者も移住者も混ざり、男女様々なメンバーで和気藹々と取り組んでいる。

3 むらづくりの取組概要

(1) 農業生産面

- ① 農業体験施設「南三陸農工房」を利用して様々な野菜を育てており、農作業や収穫の体験を通じて町外からの来訪者との交流促進とファンづくりを行っている。また、近年若者の新規就農や地域で活躍する里山保全団体も発足している。
- ② 「入谷サン直売所」は、生産者の顔が見える場所としての大切さを意識して、継続的に取り組むことにより、年間1千万円の売上を上げている。
- ③ 令和6年には、「しおかぜ葡萄」という新たなブランド葡萄の販売を開始し、地域の所得向上に寄与している。

(2) 生活・環境整備面

- ① 旧小学校舎を宿泊施設「さんさん館」、江戸時代末期に建築された在郷の藩士住宅を体験施設「ひころの里」、旧中学校技術家庭科室を「南三陸 YES 工房」として活用している。
- ② 宿泊・学び・交流の拠点として、研修室や和室、食堂、ワーケーション棟なども整備した「南三陸まなびの里いりやど」は、南三陸町全体の来訪者を受け入れる場として機能している。

4 他地域への普及性と今後の発展方向

本地区では、地区の文化や農業・林業などのなりわいの継承など様々な面で、移住者など地域の若者たちと共に地域おこしに励んでおり、地域資源や人材を活かした特色ある活動を行っている。旧中学校を活用したモノづくり工房で里山からの木材を加工、旧小学校を活用した宿泊施設、農作業体験、パワースポットや里山をツアーコースにするなど多彩なイベントを企画し、新たな雇用を生み出している。地域全体の総意により、農林業だけでなく、文化面も含め総合的なむらづくりを推進している本取組は、全国のむらづくりのモデル事例になり得るものである。

【開会】公益財団法人日本農林漁業振興会 常務理事 小栗 邦夫

敬称略（以下同じ）

只今から「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」を開催いたします。

私は、農林水産祭の事務局を担当しております日本農林漁業振興会、常務理事の小栗でございます。皆様にはご多忙中のところ、非常に多くの方々、多分過去最も多くの方々に参加いただきまして誠にありがとうございます。また、本日は、オンラインでも、一方方向ではございますが、ご視聴いただけるようにしております。慣れない設営ではありますが、よろしく願いいたします。

本日のシンポジウムは、農林水産祭で表彰されました優秀事例の成果を関係者の方々に広くお伝えすることにより、今後の農林水産業の発展の一助になればと例年開催しているものでございます。農林水産祭は昭和37年に始まり、今年度で64回目を迎える伝統ある行事でございます。このうち、表彰事業は、現在、七つに分かれておりまして、過去1年間の各種のコンクールで農林水産大臣賞を受賞されました、今年は500近い出品材のうち、厳正な審査を踏まえ、天皇杯、内閣総理大臣賞、それから振興会会長賞と、いわゆる三賞が授与されます。特に天皇杯につきましては、わが国で、全部で30の天皇杯が授与されておりますが、農林水産部門以外はすべてスポーツの部門でありまして、サッカーの天皇杯などが有名でございますが、その30表彰のうち、七つを農林水産部門にいただけるということで、ご皇室の熱い思いの賜物と、大変ありがたく思っているところでございます。

今年度も昨年11月、勤労感謝の日、新嘗祭の日でございますが、明治神宮におきまして表彰式典を開催いたしました。本日は、むらづくり部門で天皇杯を受賞されました宮城県南三陸町の入谷の里山活性化協議会の皆様にお越しいただきました。改めてお話をいただき、また、学識経験者の方々と意見の交換をお願いしたものでございます。天皇杯受賞後はますますお忙しくなったと思いますが、快くお引き受けいただいたところでございます。改めてお祝いと御礼を申し上げるところでございます。

それでは、本日は、共催いただいております農林水産省からは東北農政局の永井局長に参加いただいております。農林水産省を代表してご挨拶をいただきます。よろしく願いいたします。

皆様、こんにちは。東北農政局長の永井でございます。令和7年度（第64回）農林水産祭「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」の開催に当たり、一言ご挨拶申し上げます。

令和7年度第64回農林水産祭むらづくり部門におきまして、栄えある天皇杯を受賞されました入谷の里山活性化協議会の皆様、誠におめでとうございます。入谷地区は、東日本大震災、そしてコロナ禍という大きな困難を乗り越えながら、地域の自然、水田や畑、有形文化財指定の松笠屋敷、廃校などの地域資源を最大限に活用し、移住者や若い世代を巻き込みながら、農業体験や木工体験学習等の多様な活動を重ねてこられました。そのご努力が今回の受賞につながったものと深く敬意を表させていただきます。皆様が多様な人々を惹きつけ、継続的な関わりを数多く生み出してきたことや、異なる世代が交流しながら、豊かな里山において楽しくむらづくりをされていることは、人と人、人と自然をつなぐ、まさに「海と山の絆で苦難を超えて、次世代にしなやかにつなぐ」という言葉そのものであり、東北のみならず、全国の農山漁村にとって参考となる先駆的な実践例であります。

本日のシンポジウムでは、農林水産祭中央審査委員会むらづくり分科会市田主査からの選賞審査報告、受賞された入谷の里山活性化協議会からの業績発表をいただくほか、有識者や関係行政機関の方々を加えたパネルディスカッションが予定されております。本日の議論がむらづくりに携わる方々の新たな着想や連携のきっかけとなり、さらに多くの地域へと成果が波及していくことを期待しております。

東北農政局といたしましても、農山漁村地域の活性化が図られるよう、農村政策の推進に引き続き取り組んでまいります。その取り組みの一つとして、「豊かなむらづくり表彰事業」や「ディスカバー農山漁村（むら）の宝」の優良事例団体等の方々が相互に情報交換を行い、さらなる発展につながるよう、東北地域における農山漁村地域づくりネットワークを近く立ち上げたいと考えております。地域づくりは一朝一夕には成り立ちませんが、ともに歩む仲間が増えることで、その歩みはより確かなものになると考えております。

結びに、本日のシンポジウムが参加者の皆様にとり、実り多いものとなるとともに、入谷の里山活性化協議会のさらなるご発展、並びに本日ご参加の皆様のご健勝とご活躍を祈念いたしまして、私の挨拶とさせていただきます。本日はどうぞよろしくお願いいたします。（拍手）

○司会 ありがとうございました。続きまして、シンポジウムの開催に当たりましては、

宮城県を初め、多くの関係者の方々にお世話になっております。この場を借りまして、厚く御礼を申し上げます。本日は、宮城県知事の代理として農政部の石川部長に参加いただいております。県を代表してご挨拶をよろしく願いたします。

【挨拶】 宮城県知事 村井 嘉浩
(代読 宮城県農政部長 石川 佳洋)

ご紹介いただきました県の農政部長の石川でございます。本来であれば、村井知事が参りまして、お祝いの言葉を申し上げるところでございますが、あいにく本日都合がつきませんでした。阿部ンジャーズの皆様によろしくということで、祝辞を預かってまいりましたので、私から代読をさせていただきます。

本日、令和7年度（第64回）農林水産祭「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」が盛大に開催されますことにお喜び申し上げますとともに、実施に当たりご尽力いただきました農林水産省並びに公益財団法人日本農林漁業振興会の皆様を初め、関係者の方々に深く敬意を表します。また、改めまして、令和7年度農林水産祭むらづくり部門において栄えある天皇杯を受賞されました入谷の里山活性化協議会の皆様に心からお祝いを申し上げます。

入谷の里山活性化協議会の皆様が、世代や性別を超えて、地域全体で取り組んでこられた農林業や地域資源を生かした体験プログラムなどのさまざまな活動は、高齢化や過疎化が進む地域においても交流人口の増加や雇用の創出など、地域経済の活性化につながるものであり、持続可能なむらづくりを推進する事例としてモデル的な取り組みであると考えております。

県といたしましても、農業生産に関する技術指導や農泊の推進のための支援をしてきたところであり、今回の受賞を契機にこうした取り組みが県内各地に広がり、地域の活力が向上していくことを期待しているところであります。

本日のシンポジウムでは、天皇杯を受賞された入谷の里山活性化協議会からの業績発表に加え、地域づくりの専門家を交えたパネルディスカッションが行われると伺っております。議論を通じて、地域におけるむらづくりのポイントや、活動を継続させるための知恵が深く掘り下げられることを楽しみにしております。

ご来場の皆様におかれましても、本日のシンポジウムがそれぞれの地域における課題解決や新たな展開に向けて大きな学びの機会となりますことを願うとともに、引き続き、宮

城県の農山漁村の振興に一層のお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

結びに、本シンポジウムの成功とご来場の皆様、並びに関係者の皆様のご健勝とご活躍を心から祈念申し上げて挨拶いたします。

令和8年2月6日、宮城県知事、村井嘉浩。

代読でございます。

本日は誠にめでとうございます。（拍手）

○司会 ありがとうございます。また、地元の南三陸町からは町長の代理として三浦副町長に参加いただいております。ご挨拶をお願いいたします。

【挨拶】 南三陸町長 千葉 啓
(代読 南三陸町副町長 三浦 浩)

皆様、こんにちは。ただいまご紹介をいただきました南三陸町副町長の三浦でございます。本来でありましたら、千葉町長が参りまして、親しく挨拶申し上げるところでございますが、別の公務のため出席ができません。代わりに挨拶を預かってきておりますので、代読させていただきます。

本日、ここに令和7年度（第64回）農林水産祭「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」の開催に当たり、天皇杯受賞団体の自治体として一言ご挨拶を申し上げます。

本日は、農林水産省東北農政局長、永井春信様、宮城県知事、村井嘉浩様代理、宮城県農政部長、石川佳洋様、並びに日ごろから、農業振興、農村振興にご尽力をいただいております関係機関皆様方のご出席を賜り、天皇杯受賞団体、入谷の里山活性化協議会の業績発表の場をいただきましたことに対し、衷心より御礼を申し上げます。

さて、農業が抱える問題につきましては、皆様ご承知のとおり、担い手の高齢化、担い手不足、遊休農地の増加による地域活力の低下に加え、異常気象による農作物被害が深刻になるなど、日本の農業と農村は依然危機的な状況でございます。こうした状況の中、令和6年には、私たちの食卓を支える食料農業農村基本法が平成11年の制定以来、四半世紀ぶりに改正をされました。私たち基礎自治体といたしましては、今般の食料農業農村基本法改正は、単に法律を改正しただけでなく、私たちがこれからどんな食料を食し、どんな環境で生きていくのかという、未来のあり方を左右する大きな動きであり、これにより、持続可能で効率的な農業の実現を大きく後押しするものと期待をしているところであります。昨年11月に公表されました農林業センサスの数値を見ますと、個人経営を中心に農業

経営体の減少が続く一方で、法人化や規模拡大が進展しており、1経営体当たりの経営耕地面積も増加し、経営耕地面積20ha以上の農業経営体の面積シェアが初めて5割を超えるなど、日本全体として見ますと、農業の生産構造や就業構造の変化が数値として表れております。しかしながら、本町農業の現状といたしましては、生産条件が不利な中山間地域であることなどから、生産構造や就業構造の変化についてはいまだ生じていないのが現状でございます。こうした状況については、本町のみならず、中山間地域や過疎地域共通の課題ではないでしょうか。

このような中、手前味噌となって恐縮ではございますが、地域にある資源を最大限に活用し、地域ぐるみで農村振興に取り組む入谷の里山活性化協議会の取り組みは大きな可能性を秘めているものと考えているところであります。これからの農業振興、農村振興はオールジャパンで取り組む必要があります。

結びに、未来を支える農業として、ここ宮城から新たな風が起きるよう、そして本日のシンポジウムがその一助となることをご祈念申し上げまして挨拶といたします。

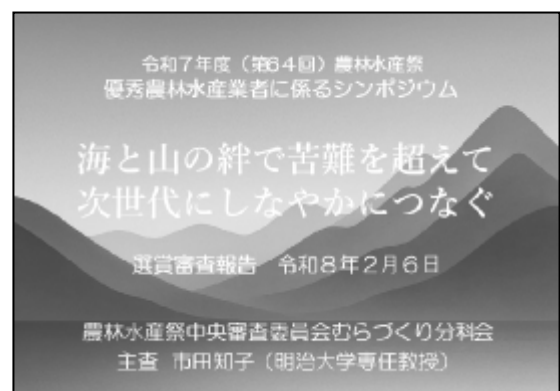
令和8年2月6日、南三陸町長、千葉啓。

代読でございます。本日はよろしく願いをいたします。（拍手）

○司会 ありがとうございます。それでは、これから議事に入ります。まず、選賞審査報告でございます。中央審査委員会、むらづくり分科会の主査、明治大学農学部都市田専任教授をお願いいたします。

【選賞審査報告】農林水産祭中央審査委員会むらづくり分科会主査 市田 知子
(明治大学農学部専任教授)

初めまして。紹介いただきました明治大学の市田と申します。私からは、むらづくり部門の審査会でどのような選考が行われたのか、どのような点で今回受賞された入谷の里山活性化協議会が評価されたのかということを中心にお話ししたいと思います。後ほど阿部忠義さんから具体的なお話があると思うので、その前座としてお聞きいただければと思います。まず昨年、2025年の7月から9月にかけて、現地視察、選考を行いました。実際、三つのところが候補に挙がったわけですが、そちらをすべ



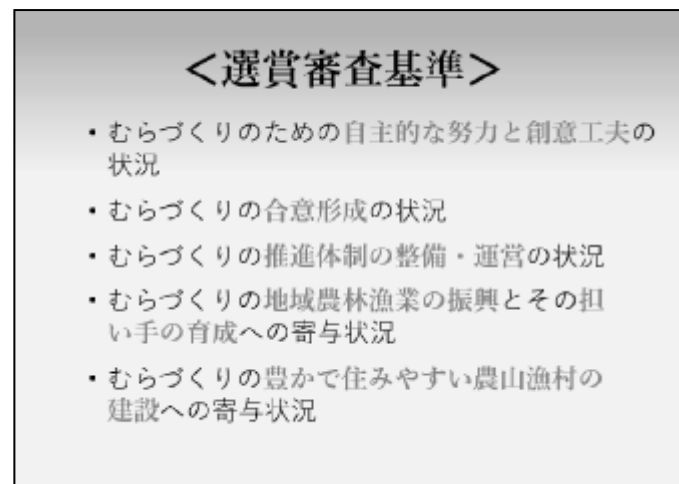
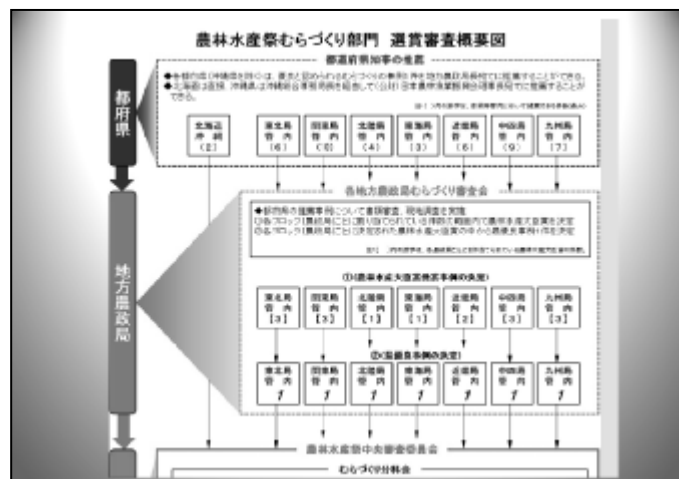
て委員で分担しまして、足を運び、
 現地の様子、関係者の方からお話を
 伺うことができました。資料にあり
 ますように、南三陸町の他に福井県
 池田町、鹿児島県霧島市も訪ねた結
 果、天皇杯候補は南三陸町の入谷の
 里と決定いたしました。

各部門、審査の基準というものが
 あり、このスライドにある五つが
 重視されております。まず、むら
 づくりのための自主的な努力、創
 意工夫がなされていること、上か
 ら言われてではなくて、地域の人
 たちが自ら努力、工夫をされてい
 るということです。そして、2番
 目は合意形成です。これは実際な
 かなか難しいですが、関係者の合意
 形成をされているということです。

3番目に、活動をどう進めるかとい
 う推進体制の整備、運営が計画的に
 なされていることです。4番目とし
 ては、地域の農林漁業を振興してい
 き、さらにそれを担う人たちを確保
 したり、その人たちを育成したりし
 ていることです。最後に、5点目として、農林漁業以外の仕事、生活をしている人たちも
 含めて、豊かで住みやすい農山漁村が作られていることです。

入谷の里山活性化協議会の方々のお話や、現地を視察する中で、この5点がいずれも優
 れていると思いました。しかも5点が結びついているという印象を受けました。

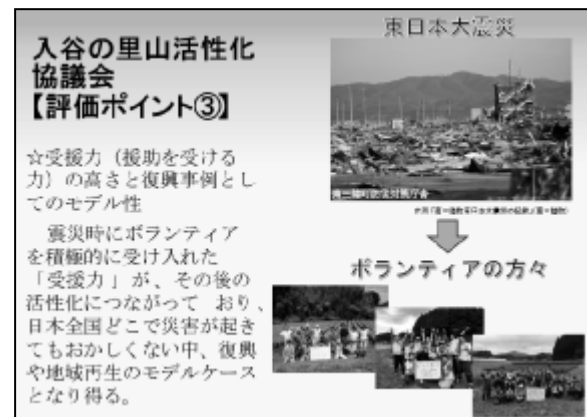
こちらにもいらっしゃっている4名の阿部さん、阿部ンジャーズの方々リーダーでも
 あり、かつ多様な方々をつなぐ要となっている点が際立っています。特にコロナで来客が



減ってしまったことを踏まえて、どうかしようとして立ち上がったのがこの阿部ンジャーズであるとうかがいしました。とても穏やかな、温かな方々であり、周りに常にいろんな方々が集まってきて、気兼ねなくつながっていらっしゃる様子がとても印象的でした。



活動内容の写真はほんの一例ですが、いずれも若い方々、女性の方々、お年を召した方々が年代、性別、あるいは地元、地元以外かにかかわらず、緩くつながっています。活動内容も多岐にわたっています。そういったことが幅広い人たちを受け入れる条件になっていきます。こちらの写真は、同じ南三陸町の中の特に震災の被害、津波の被害が激しかった沿岸部、旧志津川地区の方々との関わりを表しています。入谷地区は震災後、避難の場所を提供したり、復興支援をしてきました。昨年の8月に現地視察に伺ったときに印象的だった言葉として、「我慢の



10年」という言葉がありました。まず震災、2011年からコロナの20年、21年ごろまでは、やはり震災の被害がひどかった沿岸部をいかに復興していくか、ハードの工事もこの間にずいぶんなされましたが、住んでいた方々が高台避難をしたことも含めて、沿岸部の方々を優先に私たちは考えたとき、入谷の方々はおっしゃっていました。その後、2020年、2021年頃に「私たち中心の活動も始めていこう」ということになり、その間の10年が「我慢の10年」だったということです。そして、それと関係するのが、こちらのスライドにもある「受援力」です。「受援力」とは、全国からいろいろな支援物資やボランティアの人たちが来る場合、断らざるをえないこともあります。特に物資の場合は、すべて使えるものかどうかという問題もあります。入谷地区でお話をうかがった際にとっても印象に残って

いるのは、「すべて受け入れた」というお話でした。これはなかなかできることではない
 と思いました。

最後のスライドは、
 むらづくり部門の審査
 にこれだけの数の地区
 が参加し、段階を経て、
 最終的に天皇杯を受賞
 されたということを示
 しております。

以上、簡単ですが、
 入谷の里山活性化協議
 会の優れた点を、紹介



させていただきました。最後になりましたが、協議会の皆さん、そして関連の皆様、天皇
 杯のお祝いを心より申し上げます。これからも活動を末永く続けていただきたいと応援し
 ております。どうもありがとうございました。（拍手）

○司会 市田様、ありがとうございました。続きまして、業績発表でございます。入谷の
 里山活性化協議会の事務局長の阿部忠義様にお願いをいたします。

**【業績発表】令和7年度（第64回）農林水産祭むらづくり部門 天皇杯受賞
 入谷の里山活性化協議会 事務局長 阿部 忠義**

南三陸から参りました入谷の里山活性化協議会の阿部と申します。よろしくお願いま
 す。（拍手）

本日は、このような場をセッティン
 グしていただきましてありがとうござ
 います。天皇杯という大変光栄な賞を
 いただきまして、本当にびっくりしま
 した。地域としても身の引き締まる思
 いでおります。今回の私の業績発表な
 のですが、「おめでとう」で終らせな



いためにちょっと仕込んでまいりました。大変うれしいのですが、「よかったね」だけで

はもったいないという、次の行動をひらいていきたいという部分が入っております。ここに書いてありますが、私たちはこの受賞をこれまでの歩みへのご褒美ではなくて、むらづくりを学びの場として次にどうひらいていくかを問われているということで、先ほど来、先生方から阿部ンジャーズというお話があったのですが、結構、高齢者なのですよ。そろそろ引退かなと思っているところにこのような賞を受賞したものですから、もう一、二年頑張らなくてはならないなというところがございます。

先ほどもお話がありました
が、いまから15年前、東日本
大震災で南三陸町、特に沿岸
部、歌津、志津川、戸倉地区
が壊滅的な被害を受けました。
残念ながら尊い命をたくさん
失ってしまいました。甚大な
被害を受けた中、内陸部の入
谷地区は大津波の被害が少な



かったところ
です。南三陸町は、昔のむら単位で分けると、4地区に分かれていて、どちらかという
と、一番マイナーな地域で、その中でみんな一緒に手を取り合って頑張るしか
いけないよねという風習はずっと昔からございました。震災のときも、電気が2か
月、水道も5か月、復旧するのに時間がかかったのですが、みんなで一生懸命頑
張るしかなかったの
ですね。

震災のあったその日から入谷地区では、農家さんが多いので、米を持ち寄って、ご飯を
焚いておにぎりを握って、沿岸部の避難所に届けたという地域で、今でも志津川地区の方
には「あのときは助かったよ」と言われることがあります。

一方で、全国から災害ボランティアの方がたくさんおいでいただいて、内陸部から来た
方々の入谷地区が玄関口になったので、いろいろ困っているところに人をつないでいるう
ちに、自然とネットワークが広がりまして、つながりを「ありがとう」だけで済ませるの
はもったいないなという考えもございまして、そのつながりを交流事業につなげて来た
ところが、震災後に、入谷地区が大きく変わってきたのかなと思っております。

それで、入谷村の話で恐縮ですが、今から70年前、1955年、入谷村が志津川町と合併し
ました。それから30年たって、我々の先輩がこの入谷地区を何とかしなければいけないな

という機運が高まって

「入谷を考える会」というのを立ち上げたのですね。その5年後に「グリーンウェーブ入谷構想委員会」という団体。この団体は、入谷の地区には600弱の世帯があるのですが、全員加入している



組織で、協議会の阿部会長が「グリーンウェーブ」の会長でもあるのですが、地区民が一緒になって地域づくりに力を入れてきているんですね。その5年後に、コロナショックがきっかけで、もうちょっとフットワークの軽い組織、実行部隊が必要という考えのもとでできたのが当協議会でございます。

もっと歴史をたどれば、入谷地区は約300年続いている入谷のお祭り、「入谷打囃子」というのがありますが、これがベースとなって、他地域と比較するとまとまりのある地域なのかなと。このお祭り、入谷地区を4つに分けて、4年に1度、オリンピックのような感じで、当番講が入谷八幡神社の例大祭において入谷打囃子を奉納する仕組みになっています。その祭りは決して楽ではないのですよ。ぎりぎりのところで維持しているのですよ。この祭りは子どもも、大人も、たとえば小太鼓、笛、大太鼓、獅子舞、愛子と、とにかくむら全員、まるがかりでかかると成り立たない祭りです。お年寄りも、花輪（ばれん）という花を手作りで仕上げるんですよ。お母さんたちは練習する子どもたちのおやつを作ったり、むらの全ての人に関わらないと成り立たない祭り。むらの習慣がいろんなことでまとまりがつく地域なのかなと、改めて感じております。

活性化協議会は2021年に設立したのですが、まず結論めいたことを最初に言います。やはりむらづくりで一番大切なのは、地域を耕して、芽が出る土壌を育むというか、育てるということだと思っています。そして若者や、移住者が、どんな種を蒔いても発芽するような、新しい手法を柔軟に受けとめる。応援して見守りながら、そういう空気をつくるということなのかなと思っています。芽が出る環境を整えることが、つまり地域を耕す、そしてむらの未来につながっていくのではないかなという考えです。これは農業で当たり前のことなのですが、地域も同じだと思います。正直、我々が種を植えても大した実になら

ないので、土づくりから始めようというところなのですね。

今回のシンポジウムに向けて、皆で、ない頭で考えて、ひねり出しました。これはキャッチコピーなのですが、「むらづくり、ちょっと面白いかも」。これがビジョンといいますか、「学びが循環するむら構想」ということで、ある意味、宣誓書。お手元のプリントにもあるようですので、じっくり、3回ぐらい読み直してもらおうと、私どもの考え方がわかるかと思うのですが、「一むらづくりから学ぶ、人間社会のかたち一むらづくり、ちょっと面白いかも」というコンセプトで展開していきます。要するに、むらから学んで、社会につなぎ、未来へ手渡す。「私たちは人と地域がともに育つ環境をこの南三陸から、しなやかに育んでいくことをここに宣言します」、憲章みたいなものですが、会場に来たら、演題に

「しなやか」と書かれていましたので、ここで使わせてもらいました。

どんなことを展開していくかというところ、この構成図にあるように、学ぶ、つくる、試す、根づく、これで今年は展開していきたいなと思っています。去年は、伊達藩養蚕の祖と言われる山内甚之丞の生誕330年の記念の年ということもあり、その甚之丞さんの功績を称えて、甚之丞プロジェクトを起ち上げ1年間様々なイベントを展開し結構頑張りました。




学びが循環するむら構想（宣誓）

— むらづくりから学ぶ、人間社会のかたち —
むらづくり、ちょっと面白いかも。

- 私たちは、南三陸・入谷のむらづくりを、大がかりに生きる人間社会のかたちを学ぶ場と位置づけます。
- 震災という大きな足跡を経て、農・漁・海・林と向き合いながら、暮らすむらは一歩一歩、歩みを重ねてきました。
- その日々の営みの中にこそ、それからの社会に必要な知恵と姿勢が息づいていると、私たちは確信しています。
- 私たちは、この南三陸・入谷のむらをひらき、学びの場として、地域の内外に開いていきます。
- 研修や実習、村社や実践を通して、子どもも考え、ともに学び、その学びを社会へと還元していきます。
- むらから学び、社会へつなぎ、未来へ手渡す。
- 私たちは、人と地域がともに育つ環境を、人と地域がともにしなやかに育んでいくことを、ここに宣言します。

—入谷の里山活性化協議会—



※、南三陸・入谷は豊かです。

その話をすると長くなるので割愛しますが、今年度、2026年はこれ（学びが循環するむら構想）で、ちょっと頑張ってみようかなという事です。今までやったことをブラッシュアップするのですが、



体制を強化しつつ、変わっているところはワーキングホリデー的な、あるいはクリエイター・イン・レジデンス的な部分で、ちょっと注目を浴びている部分があったいなと思って、次のステージを想像しながら展開していきたいと考えています。

これは当協議会の主な取り組みです。農泊事業です。農泊というのは、皆さん、ご承知のように、宿泊、食事、体験、この3本柱で展開していく事業です。食事、農業体験受け入れ、宿泊受け入れ、新たな学習ということで、

当協議会の主な取り組み

<p>1.食事メニュー開発 里山ランチ竹炭弁当（地産産物80%使用）：R3年度秋913個、春976個販売、R4年度秋1,001個、春959個販売、教育旅行やトレイルなどの団体から毎年受注（500個）、R7基之丞弁当（500個）の実績、また、ビーガン料理や精進料理、大豆ミートを使ったメニューや地域の山菜、黒米を使ったメニューなども開発。</p> <p>2.農体験受入体制整備 農作業・収穫作業体験各種イベント実施、農場整備。継承対策を兼ねて、GTインストラクター等を中心とした実証実験イベントを多数実施。7名</p> <p>3.宿泊体験受入体制整備 快適なワーケーションを提供、宿泊者のお散歩コース充実化</p> <p>4.新たな体験学習 モノづくり体験プログラムの造成、教育旅行、木育ツアーなどの大人数の体験受入が可能にし、年間4,000人の実績。また、若者に人気のあるサウナや、健康志向のファスティングなどのプログラムを開発中。</p>	<p>5.里山フィールド管理 堂子山やひころの里、花見山を登備し、地域団体との連携で体験フィールドの拡充。森林浴プログラム開発、薪割・炭焼きプログラム復活。</p> <p>6.地域イベントの充実 主要イベントとのコラボレーション実施、地域内関係者と連携して宿泊者UP。</p> <p>7.事業推進体制づくり 新たなインストラクター等を養成し、プログラムの開発や実証実験などを積み重ねプランディング化。体験学習受入窓口一本化し、観光協会との連携を強化。主要イベントとのコラボレーション実施、地域内関係者と連携して宿泊者UP。</p> <p>8.里山文化交流事業 演劇や落語、映画などの本物の文化・芸術に接してもらい、住民の福利厚生を回りながら、文化芸術の意識が高まる里山地域づくりにつなげている。世代間交流活動にもつながっている。地域の経済活動も大切だが、地域住民を対象とした文化活動も、地域づくりにおいては重要である。</p>
--	---

これはYES工房を中心の交流事業、ものづくり体験をやっているのですが、そういうこととか、あと、里山フィールドと、山の方も環境整備とか、もろもろ展開しています。あと、今日もいろいろイベントのチラシを配付させていただきましたが、そんな感じで、常に、人が集まり場、共感する場を意識して展開しているというようなところなんです。要は、そういう活動を積み重ねていくと、自然と事業の推進体制はできていくもので、まずは考えるよりも行動、腕を組むよりも行動しようというような形のスタンスで協議会は頑張っています。

ここまではグリーンツーリズム推進と何ら変わらないのですが、うちの団体で特徴のあるのは8番で、里山文化交流事業。これがまたいいのですよね。今年で3年目になります

が、演劇、落語、映画、これを入谷地区で開催しています。これは文化会館みたいな立派なところを使うのではなくて、本当にみんなが集まり、集会施設でやったり、ひころの里という入谷を象徴する文化財的な建物があるのですが、そういうところでやるという。面倒くさいやり方でやっているところが意外とコアファンも出てきて、充実した展開をしているところなんです。

活動実績のほうは、余り自慢できる内容ではないのですが、普通に頑張っているという

ことです。豊かなむらづくりというのは、経済活動なのか、住民福祉なのか、文化活動、あるいは居心地のいいむらなのか、その手法はいろいろあると思うんですよ。強いて言えば、そのむらに住む方も、関わる方も、満足度の高い地域ということかなと思って、そんなことを意識しながら対応しているところです。

写真で見ると、繰り返しのようになりますが、お祭りの写真、ひころの里という施設の写真、サン直売所、校舎の宿のさんさん

活動実績										
種別	年度	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025見込	売上累計
良への	総額	14,000千円	15,000千円	7,000千円	7,500千円	12,000千円	13,000千円	12,500千円	13,000千円	※平均単価1,000円
	種別	映画・演劇・落語・音楽演奏・竹楽・民謡・その他イベント（※地域団体は300名未満）								2014年上11,000千円、2015年上13,000千円
体験する	総額	3,000千円	3,000千円	3,000千円	3,000千円	3,000千円	4,000千円	3,500千円	4,000千円	※平均単価1,000円
	種別	農業体験、食の体験、毛ノ子くわあ体験（※コロナ影響あり、2020年～2021年休演）								2014年上5,250千円、2015年上6,000千円
学ぶ	総額	6,000千円	6,000千円	5,500千円	4,500千円	7,000千円	7,500千円	6,500千円	7,000千円	※平均単価5,000円
	種別	講座・講座・ワークショップ、おんごん祭の観望者の入場（※コロナの影響による減少）								2014年上9,000千円、2015年上13,000千円
イベント	総額	5,000千円	5,000千円	500千円	300千円	2,500千円	2,500千円	3,000千円	4,000千円	※平均単価1,000円
	種別	おんごん祭、おんごん祭、おんごん祭、おんごん祭、おんごん祭、おんごん祭、おんごん祭、おんごん祭								2014年上3,000千円、2015年上3,000千円
夜間売上		12,700	12,700	12,500	12,800	12,750	11,910	12,250	12,250	※前年比増減率は100%未満の数字で記載

活動の主な変遷								
初年度	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025見込
2014年から 農業と観光 の融合を 目指すこと による交流 事業を地 域の中心 とする	農業・体験 学習による 交流事業を 推進。	農業・体験 学習による 交流事業を 推進。	コロナ禍の 影響による 交流事業の 停滞。	入谷の農業 活性化に 関心をもち、 地域活性化 を推進。	入谷の農業 活性化に 関心をもち、 地域活性化 を推進。	交流事業の 再開、本場 につなぐ。	おんごん祭 の再開、地 域の文化交 流事業を 推進。	おんごん祭 の再開、地 域の文化交 流事業を 推進。

※2021・2022年度は前年度比増減率（※コロナの影響による減少）



館、YES工房、農工房、いりやどなど、写真にあるような活動をしているということですね。このような文化活動とか、里山の保全とか、写真のイメージのようなことを展開しています。

それで、活性化協議会の組織ですが、交流事業者6団体で結成しています。ひころの里直売所、それからさんさん館、YES工房、農工房、いりやど、この六つの団体がそれぞれ一生懸命がんばっているところに、六つの団体に一本の横串を



指して運命共同体化したイメージなのです。ちょっと団子に見えませんが、そんなイメージなのです。だから、他の地域もいろいろ頑張っていると思うのですが、横のつながりというレベルではなくて、横串をグッと指してやる、そんな一歩進んだ、踏み込んだ、コンソーシアムよりも強く、ホールディングスのちょっと手前みたいな、ちっぽけな取り組みですが、横串を指すことによって一体的に見えるというところが一つのポイントなのかなと思っています。

そんな感じで、横串の役割が先ほど来い取り上げていただいている阿部ンジャーズですね。たまたま協議会の幹部が阿部さんだったのです。今、国政選挙中ですので、新党阿部ンジャーズ党みたいなイメージですね。党首（会長）は阿部國博さん、副党首（副会



長）は阿部博之さん、そして選挙対策委員長ですかね、部長ですか、（監事）勝善さん。そして私は幹事長（事務局長）になりますかね。そんなことで展開しています。写真の下に書いてあります「地域を耕す土着型秘密結社」なのです。本当は秘密結社がこういう

場に出てはだめなのですが、ちょっとばれてしましまして、開き直りで。ということで、阿部ンジャーズが地域をつくっているわけでもなくて、実は影のほうで若者が一生懸命頑張っているところが一つの地域づくりの原動力となっています。黎亜さんとか、ほのかさんとか、あい子さんとか、大森君とか、こういう人たちがいるから阿部ンジャーズももう一踏ん張り土を耕してみようかなというところがうまくいっているように見える戦略かなというところなんです。



ここで、ちょっと音響を高めをお願いしてもいいですか。これが見せ場の一つです。では、調子に乗ってミュージックビデオをつくったので、ご覧いただきたいと思います。

〔ビデオ放映〕 (拍手)

こうやってふざけたことを本気でやると、意外とこうした企画を共同



で成立させるというのが一つの原動力になったりするのですよね。本気で共同制作するというのも一つのポイントではないかなと思います。

そこで、調子に乗って、祝賀会をやろうとなって、12月7日、農政局さんとか、県庁の部長さんなんかも出席していただいたのですが、結構盛り上がりました。そのときの事をちょっとお話ししたいと思います。この写真がおおよその流れなのですが、会場設営は3



日前から準備しました。会場を入谷小学校の体育館を利用したのです。机と腰掛けは外から集めてみんなで運びました。写真のトラックは阿部会長のトラックです。会場の設営も協議会メンバーで、あと、食事も協議会のメ



ンバー、飲食店が4か所あるのですが、そこで弁当を50個ずつ作って、納品と一緒に祝賀会に出席するという面白いスタイルでやりました。オープニングは地元小学校生による郷土芸能打囃子の映像からスタートして、お付き合いのある劇団による入谷地区の民話をアレンジした創作演劇を見ていただいて、まじめな式典がスタートして、会長が挨拶して、国会議員の先生とか、県議の先生方たちにご挨拶などをももらったシーンなどがございまして、200人集まりました。裏話が結構あるのですが、ちょっと時間制限もあるので・・・。予算のないところからスタートして、町からも応援をもらったし、あと、寄付も町内の事業者さんから大分頂戴しまして、本当に盛大に祝賀会を開催することができました。お渡ししたうちにはQRコードがあるから、それで入谷の里山ネットというホームページが開けるのですが、その下のほうに動画のシリーズがありますので、後で見てもらいたいなと思っています。本当は会場で退屈するだろうから、BGM程度に繭人形劇「甚之丞物語」を上映したのですが、意外と会場の皆さんがこの世界に入り込んで、まるで映画館のようでしたね。本当にみんな感動したようで評価が高かったです。ぜひ見てもらいたいなと思っています。

それから、阿部ンジャーズの露出が高くてちょっと困ったなと思っていて、やはりこれからの未来は若者が創るので、入谷地区の4名の方にハッピーポジティブ宣言、これをビシッと決めてもらって、入谷の未来はこの4人の手のひらの中で、我々は手の上で転がされているようなものなのですが、そんなむらづくりです。

それから、「あっぱれ音頭」、これはどうするのかと皆さん思っていると思うので、その誤解を府に落ちるような感じで今ご説明しますので、後で協力してくださいね。なぜこんなことをしたかという、みんなが集まる場、そして共感する場、要するに格式ばらず、

祭のような、そんな祝賀会にしようというコンセプトからスタートしましたので、動画の記念撮影的なイメージです。本日も、ある意味、記念すべき日でもございますので、皆さんの協力ももらって動画の記念撮影を撮りたいと思いますので、ご協力お願いしたいと思います。若干レクチャーします。一発で撮りますので。田舎では祝い餅まきをするのが定番でして、2階から餅まき。餅まきは会長さんの息子さんですが、こういう感じで仕上げている。これは、資料にもありますが、地域の人を巻き込んで、わざと、一手間、二手間かかる手作りの祝賀会にしたんですよ。これがむらづくりだと私は思っています。最近、コスパの時代、コストパフォーマンス、効率・合理化、よく聞きますよね。わが社でもそういう感じでやるときもあるのですが、さっき博之さんともしゃべったのですが、この社会、無駄が必要ですよという話に至ったのです。無駄をある程度取りながら、むらを盛り上げていくということが必要なのかなと思っています。こういうのを「巻き込みニュケーション」と言うのですよね。ネタはバレバレでちょっとやりにくかったのですが、そんなことです。

そういうことで、皆さんに協力してもらいたいのですが、まずこれから流す

「あっぱれ音頭」というものですが、うちわを両手に持って、動画を見るところするんだなとわかるから、それを右に左にみたいな感じで、見よう見まねでやっ



て、動画を見てもらいます。終わったら、2回目はみんな立っていただいて、バッチリ動画を撮らせてもらいます。オンラインで見ている方はちょっと何をやっているかわからない感じですが、しょうがないですね。そこはお許してください。最初、練習を流しますよ。練習してください。

〔ビデオ放映〕

これを見てわかったと思いますが、最後、「あっぱれ」と、そろわないとかっこう悪いのですよ。一発でそろえてください。あとはグダグダでもいいです。まずもって、起立をお願いしてもいいですか。最初は、見てわかったと思うのですが、「あっぱれ」と両手を

挙げて、恥ずかしがると失敗ですよ。馬鹿をまじめにやる、これがポイントです。大丈夫。プライドを捨ててください。一発OKですからね。あとは、ずっと右、左というのを合わせてもらって、途中になったら自由に回転してもいいですし。では、時間の関係でスタートしますよ。一発OKで。皆さん、スターになったつもりで、はい、いきます。音響をお願いします。

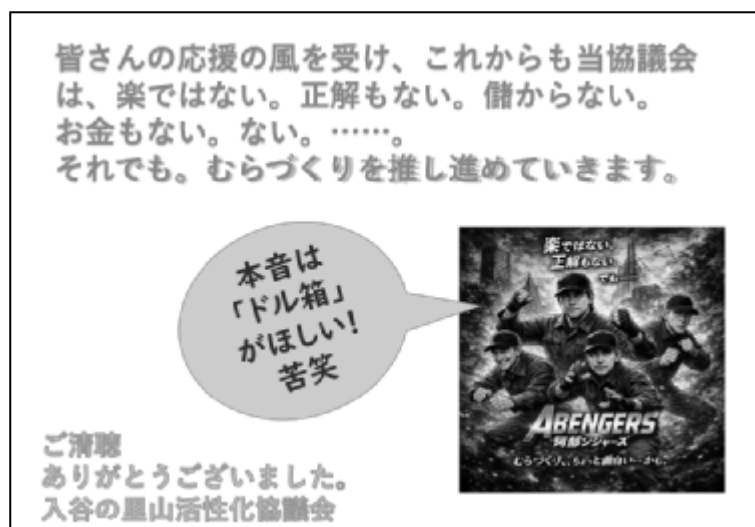
〔ビデオ放映〕

上手だ。90点あげましょう。ありがとうございます。（拍手）

うちわは記念に持ち帰ってください。お願いします。

締めます。

これからも当協議会は、楽ではない、正解もない、もうからない、お金もないですが、それでもむらづくりを押し進めていきます。本音はドル箱が欲しいのですよ。でも、ここはきれいにまとめなければいけないので、この先も皆さんの応



援をいただきながら展開してまいりたいと思いますので、よろしくお願いします。ご静聴、ありがとうございました。（拍手）

○司会 阿部忠義様、大変ありがとうございました。ここまで2件のご報告にご質問などもあろうかと思いますが、後ほどパネルディスカッションの中で会場から参加いただく時間もありますので、その中でお願いをいたします。ここで10分間ほど休憩を取ります。なお、参考資料としてお配りした中に活性化協議会、それから東北農政局、それからコメンテーターの小谷様からの資料が提供されておりますので、休憩中にでもご覧いただければと思います。それでは、再開は14時45分にしたいと思いますので、それまでにご着席をお願いします。

（ 休 憩 ）

○司会 それでは、再開いたします。これからはパネルディスカッションでございます。進行はコーディネーターとして市田主査をお願いをいたします。よろしくお願いいたしま

す。

【パネルディスカッション】

コーディネーター 農林水産祭中央審査委員会むらづくり分科会主査 市田 知子

それでは、入谷の里山活性化協議会の今回の受賞をお祝いして、さらに活動について広く知っていただきたいという趣旨でパネルディスカッションを始めます。

早速ですが、こちらにお座りの阿部國博様と阿部博之様、お二人にお話を伺います。受賞以来、皇居で両陛下に拝謁されたなど、慌ただしかったと思うのですが、まずは皇居での拝謁の感想から、さらにその後の地元の人たち及び外からの注目度合いがかなり変わったと思うのですが、そのあたりも含めて、それぞれお話しいただきたいと思います。

○阿部（國）（天皇杯受賞者） 協議会の会長を仰せつかっております阿部でございます。会長と言ってもほとんどやっていることは、副会長なり、事務局長なりが車の両輪のようにバーンと進むので、私はただそれに乗っかっているだけで、イベントの挨拶要員ぐらいしか仕事がないなと思っています。

今回、天皇杯をいただきまして、皇居で両陛下にお会いする機会があったのですが、大変緊張しながら拝謁させていただきました。ただ、7部門の中で、それぞれ順番に1分の説明、それから3分の質疑応答ということで一応決められておりましたが、大体時間がオーバーするのです。ただ、最初に説明をされた山形のおしの農場さん、大変立派で、説明が50秒という、測ったような時間で終わらして、その後の質疑応答はちょっと長引きましたが、陛下は大変穏やかな方で、我々の緊張をほぐしていただけるような、本当にやさしい言葉をおかけいただいたなと思っています。それから具体的な質問と申しますか、活動なり、パネルとかを並べていろいろ説明するのですが、それに対する質問はむしろ陛下よりも、雅子皇后様のほうが積極的にいろいろ聞いておられまして、前の6団体が終わるのを緊張しながら、どういうふうに答えたらいいのかなと考えながら私たちの時間をお待ちしていたのです。

やはり、いざ、目の前で、1m以内でお会いしてのお話でしたので、最後、汗をかくような、「あっ、緊張しているんだな」というのを改めて感じておりました。実は説明の中でやってはだめだよと言われたことがありまして、そこに並べてあるものを直接陛下にお渡ししたり、差し上げたりすることは絶対やめてくださいと言われていたにもかかわらず、蛸のモチーフ、オクトパス君、陛下がすごく気に入っているようなことがありましたので、

「これは実は合格祈願のグッズで、しかも文鎮なのです、結構な重さがあります。陛下、お持ちになってみますか」ということで、差し出したら、陛下は「じゃ、ちょっと」と、お持ちいただいたのです。「あー、重いですね」と、隣の雅子様へすぐ手渡して、持ってみなさいみたいな感じで、雅子皇后様もそれをお持ちいただいて、「あっ、そう言えば、だめだと言われていたな」と、そこで思い出しました。受け取って、また戻したのですが、すごく気さくな感じで質問をされたりして、先ほども言われましたように、東日本大震災は大変でしたねというふうな、やさしいお言葉をいただきました。大変ありがたかったです。二度とないことだと思います。お会いすることもないので、なかなか貴重な体験をさせていただきました。今回は本当にありがとうございました。

○阿部（博）（天皇杯受賞者） 同じく、副会長の阿部博之です。よろしくお願いします。

皇居での天皇陛下の拝謁は、今、会長が全部しゃべったので、私は割愛させていただきます。

地域では、天皇杯というよりも、天皇賞を取ったように皆さん言っていて、大きなお金に当たったのかなという、そんな感じの挨拶をよく受けました。改めて天皇杯だよということをいろんな場面だったり、マスコミだったり知れ渡るにつれて、いろんな方々が「すごいね」ということで、われわれに敬意を表すると言うと変ですが、「あなたたちのやっていることってすごいことだね」ということを改めて皆が言うので、私たちのこの5年間で決して無駄な5年間ではなくて、しっかりとしたむらづくりに値することをやってきたんだなということで、自信につながったような、そんな時間でしたね。これからも改めて引き締めて次の展開を模索しながらまた頑張っていきたいなと思います。

○市田（コーディネーター） とても温かい雰囲気が伝わってくるお話をありがとうございました。本日のパネルディスカッションは、こちらにお座りの阿部様お二人を初め、東北農政局の長田参事官、農ジャーナリストの小谷様など、全国の事例をご存じの方々にご参加いただいています。東北農政局の長田参事、宮城教育大学の山内先生にうかがいます。むらづくりというのはよく知られている言葉だとは思いますが、当然ながら人がいないとできません。農村には人が少なく、いらっしやっただとしても、年配の方が中心になって、この先、どうなるのかというのは、全国的に共通していると思います。今回、受賞された入谷の里山活性化協議会の活動を次世代にどうやってつなげていくかということもまた大きな課題だと思います。

山内先生は入谷のご出身なので何でもご存じだと思うのですが、今回の受賞の前のこと

も含めて、また受賞によって、入谷の方たちに何か変化があったのか、加えて学生を日ごろご指導する中で学生が農山村、田舎に対してどういう感覚を持っているのか、お聞かせください。

○山内（コメンテーター） ありがとうございます。宮城教育大学の山内と申します。私は生まれ、育ちも入谷でございまして、この阿部ンジャーズの皆さんを、生まれる前から知っているような関係でございまして、大変楽しく、先ほど忠義さんの話を伺いました。入谷は、大変にまとまりのあるむらで、先ほど忠義さんの話にありました入谷打囃子のような古いお祭を大事にしています。ドローンから撮った村の一望がすごく美しいと思いませんか。集落の鎮守の森や風景を維持しながら、小さなむらづくりを一生懸命やってきた大先輩たちがここにおります。歴史の掘り起こしや、食文化についての女性たちの多様な取り組みがあります。現在も味噌工房、豆腐や納豆づくり、いろんなお餅をつくったり、ひころの里で定食をつくったりというふうな、とにかく地域の宝をどんどん生み出す、昔からそういう土地柄でございまして、本当に誇りに思っております。今、私は仙台と入谷の2拠点暮らしをしています。自宅は入谷にあり、こういう暮らしをしながら、このコメントをさせていただきたいと思っているのです。

率直に言って、大変に魅力的なむらです。地域のみなさんに育ててもらったという思いもありますし、風土に育ててもらったというふうなこともあります。学生を引率して行くこともあります。大きく変わったのは、やはり東日本大震災で海側の地域が壊滅状態になったということで、拠点が入谷地区に開かれていって、たくさんの学生が民間団体の方々が支援に入って、それを忠義さんや阿部ンジャーズの皆さんと、入谷の皆が受け入れて、ボランティアで泥かきしてもらおうというふうな体制づくりのなかで、若者が集落の中で動くということが日常化していったと思います。もちろん震災前も修学旅行の受け入れなどをしておりました。神奈川からの高校生を、農家民泊で受け入れ活動をしていたのですが、それがもっと大きくなったような形で今に至っていると思います。そして、都市とは違う生活ぶり、自分たちでつくって生活するという方法を、東京など都市に住んでいる学生たちは、入谷で初めて発見する。こういう生き方があるのかというふうに思ってくれるという事は、学生を見ていても感じてきたことです。

こうした過程で、入谷に移住する人たちもいて、何人ぐらいなのでしょうね。10人は超えたと思います。いつもやりとりしている友人は、東日本大震災の後に移り住んでいる女性で、彼女は高給取りだったのですが、その仕事をやめて入谷で暮らしています。もう8

年ぐらいになりますかね。「なぜここで暮らそうと思ったの?」と聞いたら、「消費する側から作り手に回りたいと思ったんだよね」と話していました。甚大地震と津波の後で、皆が苦しい状況のなかで、支え合って生きる姿や、手作りの漬物だとかお料理を毎回振舞ってくれる。彼女は、支援に行ったはずなのに、自分が恩恵を受けているということに感激して、作り手に回りたいと思ったということなのですね。おそらく生き方の問題で、私は入谷のような暮らしの世界を「生業世界」と呼んでいます。自分の小さなむらの暮らしを自分たちなりの方法で工夫する、農の暮らしを愉しむ。そういう生き方を自分でデザインできることが喜びなのだと思います。お金を払えば、食事や道具も手に入れられるのですが、自分でつくる方法もあるということです。それを若い世代は発見していくのかなと思っています。以上です。

○市田（コーディネーター） どうもありがとうございます。具体的に漬物や味噌のお話も出てきて興味深かったです。次に農ジャーナリストの小谷さんは審査の委員でもいらっしゃいます。特にこちらの入谷のように老若男女、年代、性別を超えて集って活動をしている例はほかにもあるのかどうか、また、入谷地区からはどのような点を学べるのか、その他、ご自由にお話しいただければありがたいです。

○小谷（コメンテーター） ありがとうございます。農ジャーナリストとして全国の農業、農村を取材していきまして、このむらづくりの委員も6年させていただきました。あちこちのいい事例を現地に行って見聞きするわけですが、とにかく入谷は、先ほどの忠義さんのプレゼンのように、審査委員が行ったとき、みんながどよめきました。阿部ンジャーズのように動画や歌でプレゼンされたのは多分初めてだったのではないかと。AIでつくったと。まずコミュニケーション力、コミュ力が高いというのが阿部ンジャーズ初め、入谷の人たちの特徴で、すばらしいところだと感じました。

そして、受援力の話も私たちが最初に聞きました。受援力というものが自分たちの中で培われたのだと思いますと語ってもらいました。もともと防災用語だということで、東北とか、震災に関わった人には知られている言葉だと思うのですが、改めて調べますと、頼るスキルという考え方もそうですね。支援を受け入れるという頼るスキルは決して依存ではなくて、むしろボランティアの人が何かしたいのを受け入れてあげるというような懐の大きさをすごく感じました。なぜこの入谷にそういうスキルやセンスが培われたのだろうと思ったときに、いろいろ話を聞いていると、2001年から、校舎の宿 さんさん館でグリーンツーリズム、都市・農村交流をもう25年受け入れてこられたと。そういう歴史もある

と思いました。2011年の震災の前にもう10年ぐらい都市の人との交流、あるいは学生とか、若い人の交流をしてきたと。会長が、40ぐらい体験メニューがあるとおっしゃいましたが、都市からやって来た人に体験をメニューとして提供するという事は、つまり地域資源の商品化ということ、40種類の商品が生まれていると考えることができます。地域資源は、よく言われるとおり、地元の人だけでは気づきにくいわけで、よそから来た人が「この景色、すごい」とか、「この風習、かっこいい」と言うから、おれたちの村でやってきたことを人は喜ぶんだという、いわゆる都市のニーズ、都会の人、若い人が何を喜び、何に感動するかというのを、二十数年かけて掴んでこられた。なので、ボランティア受け入れのときに、この人たちを手ぶらで帰してはかわいそうだから受け入れてあげようという、むしろ大きな受容力というものをもちになったのだと思いました。

いろんな農村をむらづくりで訪ねているのですが、入谷の里の特徴として、とにかくセンスがいい。田舎らしさをむしろ売りにしてコミュニケーションすることに長けている。だから、黎亜ちゃんのような若い人たちともコミュニケーションを取る、そういうコミユ力と、受援力と、センスのよさ、そのあたりが入谷のすばらしさだと思いました。

以上です。

○市田（コーディネーター） どうもありがとうございました。3点にまとめていただきまして、阿部様たちも納得されていると。

では、続きまして、東北農政局の長田参事官にお話を伺いたと思います。これまで東北を中心に農村の活性化ですとか、むらづくり、政策の立場から関わってこられたご経験の中から、離農現象ですとか、担い手がなかなかいないというようなことをどういうふうに関わって解決したらいいのかと。特に中山間地域ですとか、震災後、急激に人口が減ってきた地域、深刻な地域などについて感じておられていることをお話いただければと思います。お願いいたします。

○長田（コメンテーター） ありがとうございます。東北農政局で宮城の担当をしております長田と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

私は昨年度、宮城の担当で東北農政局に参りましたので、もうすぐ宮城の担当になり丸2年となります。その間に、南三陸の入谷のほうには何度も足を運ばせていただいております。行くたびに変化があることに大変驚きを隠せないという感じですが、本当に新しい発想がどんどん出てくる、そういった地域であると思っております。何度行っても学びがありますし、何度行っても面白みがある、多分、そういう地域が人をたくさん引きつけ

ているのだろうなと感じております。私、宮城に来る前は、2年ぐらい、本省で現在の農村活性化推進室長をしておりました。当時、実は農林水産祭むらづくり部門の担当もしておりまして、宮城以外のむらづくりもいろいろ見せていただいた、そういう経験がございます。

ご質問いただきました点に関しましては、本省で農村活性化についての政策を企画しておりましたとき、農林業センサスを見ましても、農村は都市に比べて先んじて人が減っている、そういうことを方々に対して説明しておりました。こちらに来て、まさにそれを実感しているという感じでございます。人がいないというのはどういうことかというのを目の当たりにしています。ただ、逆に言いますと、今、いる人の重要性というのをますます感じていますし、また、南三陸の入谷のように、頑張ろうとする人を応援する、頑張ろうとする人のやろうとしていることをサポートするという、そのことがいかに大事かということを感じております。そして、地域外から来る人、また外で応援してくれるような人に、外から手を貸そうとしてくれる可能性のある人に対する許容、受け入れ、そういうものの重要性をまた非常に感じております。少しだけ、国の今の施策をご紹介させていただきますと、やはりこれまで以上に地域外の方を地域活性化に巻き込むということが大事だというふうに考えておりますので、これまで農村に関心がなかったような主体が農村に関心を持ってもらうということを国としても推進していく考えであります。それが関係人口ということになります。そして主体としては企業も含めて考えております。令和7年に策定しました食料・農業・農村基本計画におきましては、「官民共創の仕組みを活用して、地域内外の民間企業の参画も活用しながら、関係人口の増加を図って、楽しい農村を創出する」、そういったことを記載しています。「楽しい農村」というのは、非常に深刻な中山間地域の状況を見て、軽々しく言えない言葉だなと私は思っていました。ただ、南三陸のこの入谷の皆さんを前にすると、楽しい農村というのがまさにそのとおりであると。入谷地区を希望の光といいますか、そういったものだなというふうに感じております。

そういった基本計画の中で、昨年度、農林水産省で官民共創プラットフォームというものを立ち上げておりました、そうした機運を企業のほうにも高める。それからノウハウをシェアするというのをやっておりますし、企業が農村のほうを見る、そして貢献するということのインパクトがどういうものかというのを可視化するというのに力を入れています。そして、そういった企業の行動が農村に貢献したということを証明するという証明書の発行の制度もつくっています。

東北農政局の取り組みを少しだけご紹介させていただきますと、大崎市鳴子の中山間地域のほうで企業と地域の接点づくりのお手伝いをしています。その中で、私たち行政側から事前に企業に鳴子について説明をし、これをきっかけとしてイベントに参加していただいています。イベントの中で、実際に企業の方が地域のリーダーとか、次世代リーダーとお話をする中で、学びを得て、愛着を持って、どんどん自分たちでも何かできないかというふうなマインドに変わって、検討を始められるような様子を目の当たりにしています。なので、やはり人が減っていくことは課題でありつつも、ファンを増やして、地域に関係人口をもたらすのもまた人だというふうに感じています。今後、ふるさと住民登録制度などの活用が期待されると思いますし、今後、そういった動きに注目、期待をしていきたいと思っています。ありがとうございます。

○市田（コーディネーター） どうもありがとうございます。政策の動きなどにも触れていただきまして、ありがとうございます。

一通り、「人」についてお話を伺ってきたのですが、次に、お金の問題です。まず、こちらの入谷の協議会では六つの団体が宿泊、農作業、ものづくり、文化財的な民家を使った活動に関わっているというお話でした。これらの活動は必ずしもお金もうけではないかもしれませんが、とはいえ、やはり活動を続けていく上ではお金が必要です。補助は受けたくないということでした。あくまでも自力で活動を通して所得を上げ、それを何かまた次の活動に還元していくことがこれからも課題であると思います。再度、お二人の阿部さんに、活動を通して地域を巻き込んでいくこと、いろいろご苦労をなさってきたと思うのですが、それも含めて、どういう点に注意をしていけばいいのか、どういう点が大事なのか、教えていただければと思います。では、会長からお願いします。

○阿部（國）（天皇杯受賞者） 地域活動といいますか、地域の六つの団体はそれぞれ独自に活動を展開しているわけですが、確かに運営する上ではお金が必要なので、どうやったらお金を稼げるかというのは日々考えながらやっているところでもあります。それでも、やはりいろいろなソフト事業等々がありますので、それをできる限り活用しながらということで、自ら団体ごとにいろいろ申請をしたりして、自分たちの活動を有利に、かつ楽しく、そして無理のないところで、ソフト事業の中にいろいろ制約はありますが、自分たちが制約の中でどれだけ自分たちのやりたい方向でそれを運用できるかというのを考えながらやっているというのが一番重要なことかなと。

それから、何回も出ていますが、むらづくりは定まったパターンというのはないので、

まずは若い皆さんとか、移住者の皆さんの活動も当協議会はすごく重要なポイントになっていますので、その人たちがやりたいこと、入谷に来てこういうことをやりたいんだということをまずは受け入れる。失敗はいっぱいあります。全て成功するわけではもちろんなくて、むしろ失敗のほうが多いなど。自分たちが考えたようにはなかなかいかないというのが普通なのですが、失敗したときにそれを失敗と思わない。次のステップのため、うまくなかったことを発見したんだぐらいに考えてもらうというのが大事かなと思いますし、お金に関しては、いろいろな事業を展開していく上で、もちろん農業体験とかのメニューを示したときには、それに見合うぐらいの体験料というのはちゃんともらうべきだよねということで、今までは体験とか、こんなことでお金をもらっていいのかなという声もあったのは昔の話で、今はそれは当たり前だよ、それを望んで来るんだから体験料をもらうのは当たり前だし、きちっとやりましょうということで、そういうお話を常にさせていただいています。

むらづくりを我々協議会でやっている中で、それこそ全国からいろんな方々が、むらのよさを求めて来るわけですが、そのときに、それをこれはちょっとどうかなとか余り考えないで、来たんだから、とりあえずやらせてみようぐらいの感覚で。あと、皆さんが来たときに求めるものが十分に満足できたかどうかは結果であって、こちらがそれに対して変に悩むことなく、とにかく来た皆さんの笑顔があれば、よかった、成功だというぐらいの感覚で取り組んでいることが大切かなと思っています。

私的には、ほとんど若いスタッフの皆さんがやっていることをただただ見守っているぐらいしかできない。あと、会長挨拶と呼ばれたときに「はい、はい」といって、サクッと挨拶して終わるといった感じの感覚でいますので、何か相談事があったら、ぜひいつでもいいよという感覚で受け止めています。本当にパターンを決めないというか、そのとき、そのときで、自分たちができる範囲で、緩やかに、しなやかに進めていくというのがむらづくりの大切なところかなと感じています。そこはこれからも重要に思っています。参考になるかどうかわかりませんが、そんなところです。

○市田（コーディネーター） ありがとうございます。

○阿部（博）（天皇杯受賞者） なかなか難しいテーマというか、巻き込んだりするというのは大変なのですが、先ほど受援力という話がありましたように、受けること、とりあえず支援を受けてみて、その要望に沿ったことをやってみるということも大事だなと思っています。私、震災後に日本を代表するある大企業の方々と親しくなって、頻繁にお酒

を飲んで交流を進めてまいりました。そんな中で、無農薬の米づくりにたどり着いて、ササニシキの無農薬ということに着目して、ササニシキはご存じのように宮城が発祥ですし、ササニシキの復活と南三陸の復興をリンクさせて復活していったらどうだという考えで、自分の田んぼでまず無農薬をやってみようやという感じだったのですね。むらの真ん中にある自分の田んぼなのですが、そのころ、ご存じの青森の「軌跡のリンゴ」の木村さんっておられますよね。あの方が何とか10年かけて何とか無農薬のリンゴができたということで話題になりましたが、そのリンゴを食べたよという方が南三陸にいらっしゃって、南三陸の人たちも無農薬ということキャッチーというか、思いにしているのだな、食生活に無農薬というのが入り込んでいるのだなと思ったときに、入谷で復興をかけた中でササニシキの復活の無農薬は意味があるなと思ったのですよ。それで、阿部勝善さんと一緒に、皆にどう思われてもいいから、とにかくやってみようかということで、その企業の方々も手伝ってくれたりして、ずっと寄り添ってくれた数年間がありました。それが今の若い人たちの出会いにもなってくるし、農業というものの考え方、単に米を作るということだけではなくて、米を作る背景の意味とかに思いをはせて、農業を続けていけば、若者もついてくるし、あるいは支援する方々も多分いるだろうということで、実際、ずいぶん高価なコメを売ったこともありました。そのうち、草に負けて、心が折れて、今、除草剤を1回ということでハードルを下げた。でも、それでも、ササニシキを除草剤1回だけでやっています。そういう実績も残してきましたので、そうやってむらを巻き込む一つのきっかけになればいいなということでやっているところでございます。

○市田（コーディネーター） そのササニシキの田んぼの広さはどのぐらいですか。

○阿部（博）（天皇杯受賞者） 入谷では大きい、20aです。

○市田（コーディネーター） どうもありがとうございます。活動の定型は設けない、パターンを決めないというお話、そして移住してこられた方が何をやりたいかをまず聞くということ。たとえ失敗しても、それは次の挑戦への糧だととらえるということが大事な点だと思いました。とはいえ、実際はなかなか大変なのではないかと思いつつ聞いておりました。

先ほどと順番が逆ですが、長田参事官にうかがいます。先ほど、「訪ねるたびに新しいことを発見して驚く」というお話がありました。他の地域のむらづくりも見てこられて、また、基本計画などと照らして、ズバリ、この入谷の協議会のどこが一番の特徴でしょうか。教えていただければありがたいです。

○長田（コメンテーター） ありがとうございます。1番何が特徴かというのは、すみません、二つかもしれません。

一つは、ほかの全国の優良な事例にも共通はしていますが、やはり地域にある資源をフル活用されているところだと思います。さきほど、山内先生もおっしゃっていたと思いますが、そこは本当にポイントで、ただ、その地域資源というのはほかにはない入谷のユニークさというところが魅力です。なので、地域資源というのは共通の言葉ではありますが、その地域、地域で、地域資源というものは全く異なります。なぜかという、同じものだとしても、文化が違いますし、風土が違います。そして歴史が違いますので、お祭一つとっても同じものは一つもありません。比較すると、都会のほうは似たものだらけだと私は思います。なので、そういう意味で地域資源の魅力というものは本当に深いものがあるというふうに思っています。

もう一つは、さっきも忠義さんがおっしゃっていた横串ですね。横串がやはりユニークだと思います。協議会方式ですが、ああいうふうに横串を指していることでよいことというのは、より深い連携ができていますし、そして外部に対していろいろなコンテンツを、バリエーションを持って提供できるというのは非常に魅力です。そして、ハブがあるということは外から非常にわかりやすいです。なので、地域に入っていくためには、あそこにもまず窓口があるというのが外からわかるというのは本当にすばらしいシステムになっていると思います。

○市田（コーディネーター） どうもありがとうございます。先ほどのように皆さんで踊りを踊ったりする場面をYouTubeで発信するなど、SNSを使った外部への発信を積極的にされています。入谷にしかない地域資源に注目して、商品化して、それを外部の人たちが興味を持って買ってくれるという流れもできているのではないかと思います。再度、阿部さんに伺います。実際に対外的なコンテンツから入ってこられた方はいらっしゃるのですか。特にコロナの後の阿部ンジャーズの動画を見て興味をもって訪ねてきた方はいますか。

○長田（コメンテーター） 私の言葉が悪くて、コンテンツというのは、農村体験だったり、そういういろんなアクティビティのメニューという意味であって、動画のコンテンツという意味ではありませんでした。失礼しました。

○市田（コーディネーター） わかりました。では、入谷地区からの様々な発信に対してどういった反応がありますか。狙ったターゲットではないような人が来ることもあるなど、

ざっくばらんにお話しただけであればありがたいです。地域資源に関して言うと、入谷特有の味噌、漬け物、あるいはお囃子などもありますね。

○阿部（博）（天皇杯受賞者） 入谷の場合は、純農村地帯なものですから、農業をやりたいと、昨今多いのですが、そういう若者がやはり全国にいまして、私、東京の「農業人フェア」というところに3回行ってきます。町としてブースを出すということで、そこに農業者として行って、席について、対面で話をするというのを3回やっています。そこで1日に2,000人ぐらいの人が会場に来て、将来の自分の道を模索しているということを目の当たりにしたときに、彼らが求めているというのは決して大きな農業をしたいというのではなくて、農的な暮らしをしたいんだなということは何となく感じたものですから、農的な暮らしをするには入谷みたいな小さなむらがすごくいいなということはずっと思っていて、農地も当然狭いし、余り平坦でないということが逆に生業が見えない。見えないというのがいいのか悪いかわかりませんが、平場だと、そこで農業をしていると、見ると、「何をやっているんだ」と思うし、あるいはいろんな注意なり、興味を示す人もいると思うのですが、山間の農地が点在しているところだと、余り人目につかないところで静かな暮らしをして、自分なりの農業を展開したいという人が実はいて、そういう人が結構「農業人フェア」とかに来ているんじゃないかなと思いました。

それで、今、私が関わっている人が実は3人ほどいますが、もともと山形出身ですが、岩手県から移住してきた方がいて、それは農業をしたいということで来たのです。最初は薬物の農業をやりたいということで来たのですが、「薬物を一人でやるのは大変だよ。果物をやれ」と言って、彼が来るまでの間にこっちが土地を準備して、「ここに植えろ」と半強制的に準備をしていて、そこで農業を展開させたりしていますし、あとは、キウイフルーツをやりたいという人があらわれたときも、入谷の農地をずうっと回ったときに、たまたまうちの近くで、ころあいもいい、人里離れた農地があったものですから、そこで農業を展開したいということで、今、彼がそこに入って農業をやっています。あとは、3回目にフェアに行ったときに会った方なのですが、彼も農業をやりたいということで来て、今、歌津というところでネギの法人があるのですが、とりあえず身を置いて、そこで就農しているという形です。その方の次の展開を考えていて、入谷で何らかの農業を展開していきたいということで動いています。

そういうこれから農業をしたいという人が実はいっぱいいるということはある程度感じていますので、その人たちのニーズに寄り添えるようなことをこちらがやっていけば、実

は結構人は集まってきて、入谷の農村は明るいのではないかと勝手に思っていて、その人たちがひいては畑とか、田んぼとかもやってくれるような、そういう人になってくれるだろうという希望的観測で楽しく付き合っております。

○市田（コーディネーター） ありがとうございます。

○阿部（國）（天皇杯受賞者） いま農業分野では後継者というか、よそから入ってきた、移住してきた皆さんをうちの副会長がいろいろお世話をしながらやっていたのですが、あとは、地元にいるというか、まさに地域の後継者、よそから入ってきた人たちの受け入れはもちろんなのですが、これから本当の意味での地域の後継者というか、もともといる方々、若い世代の皆さんにどういうふうにして地域活動にもっともっと関わってもらうか、それはむしろ移住してきた方々よりも意識的には、今、正直低いと思います。なぜ低いかというと、今、我々の先輩たちがまだまだ正直言うと現役で頑張っている。それこそ山内先生のお父さんなんかは私よりも10歳も上ですが、まだ現役で頑張っています。そういう方々が頑張っている姿を見て、若い世代の人たちがどういうふうと思うかというのは、むしろ私的にはといたしますか、全国の農業に携わっている皆さんは同じような気持ちを持っている方が結構いると思うのですが、若干不安があります。あんなに苦勞をして農業をやらなければいけないのかというのをずっと見てきているわけですから、中山間地、それから狭い耕地でやるというのは、コストから見ると、絶対不利な条件なのです。それでも、やはり移住して来た方々が楽しくやっている姿をむしろ地元の人が「何をやっているんだ」と見るのじゃなくて、「ああ、こういうことをやる人もいるんだ」というのにちょっと気づいてもらって、楽しんでみようというか、「親父のようにやらなくても、こういう形でもできるんじゃないか」というのを見いだしてもらう機会にしてほしいなど感じているところです。もっともっと、若い世代の人たちが自分の今の仕事をしながらでもできる。土日に強制的にやらされるのではなくて、自分の余暇を使いながら、むしろさらにその下の子どもたちと一緒に取り組めるような農業、それから企業と地域づくりの活動はないのかなというのを、もっともっと気づかせてあげられるような機会をつくっていききたいなというふうに実は思っているところです。

さっき、うちの忠義さんが説明した中に、グリーンウェーブという、入谷の520戸、強制加入。年会費はたった300円ですが、強制加入なのです。となると、そのグリーンウェーブの活動は入谷の地域の住民の皆さんがみんな納得した上で展開していかないと、不平不満がグワーッと大きくなってしまいます。大きいまとまった活動の中に実は先ほど

も出ましたひころの里という松笠屋敷を中心とした大きな文化施設といいますか、公園的な施設がありますが、その草刈り作業が年に1回、入谷の地域住民の皆さんに呼びかけて集まってもらって、草刈り機を持って、約3haほどありますので、一斉に草刈り作業を6月の第2日曜日にやります。大体150人から180人くらい参加してもらいます。皆さん、草刈り機を持ってきて、朝8時半集合で、そこから大体2時間半ほど、汗だくになりながら草刈り作業をやるわけです。まさにお願いして来てもらうので、心苦しい点はあるのですが、最初はすごく文句が出るのですが、地域として、松笠屋敷、ひころの里は、入谷の文化施設の中心なんだということをそこで皆さんにわかってもらいたいという思いもあって、その話をしながら草刈り作業に参加してもらいます。そうすると、終わった後、きれいになったところを見て、「ああ、今年も頑張ったな。よかったな」という言葉が結構皆さんから出てくるような感じになります。やはり自分たちも参加した上で、地域の活動に参加したことによって、こういう一つの成果があるのだということを実感してもらう、いい機会じゃないかなと思っています。もちろんアルバイト賃とか、報酬とかは一切ありません。無報酬でやっていただくということ。地域の文化施設を守っていくのだという思いを持ってもらうことで取り組んでいますので、そういうこともむらづくりの一つになっているのかなと考えています。

まずは、自分たちがやっていくことを無理にしてはダメなのです。強制してはダメです。あくまでも賛同してもらう。強制ではなくて賛同してもらう。一緒にやってもらうところに寛容的な思い、気持ちで取り組んでいくのが一番いいんじゃないかなとまずは思っています。

○市田（コーディネーター） どうもありがとうございました。私も昨年8月に伺った際に、とてもきれいに草刈りされているのを拝見して、それが無報酬とうかがい、感心しました。

では、時間が迫ってきましたが、山内先生、世代を超えて、いろんな思惑もある中でまとめていくということ、それがむらづくりの本質的な部分だと思います。特に地元の若い方が地域の活動に参加するにどうすればよいのかなど、日頃お考えのことがありましたら、お願いします。

○山内（コメンテーター） 今、博之さんと、國博さんにお話しいただいたのですが、平野部には100町歩とか、60町歩とかの広い田んぼが広がっていますが、三陸沿岸部の入谷では、どんなにかき集めても100町歩の田んぼなんかないわけですね。限られた土地で、

小さな農業を営んできました。いわば近代的な大型農業を営んでいくためにはハンディキャップを背負っているようなむらなのです。この小さな土地で、どんな活性化をやってきたのかと言えば、さっき忠義さんが言ったように、団子みたいに横にくし刺しをして、3万円ビジネスみたいなものを幾つも作っていった。例えば、ビーンズ倶楽部は納豆や豆腐、きな粉のような豆製品に取り組み、蕎麦打ち研究会はイベントたびに蕎麦屋を出店する。あるいは生活研究会の女性たちは味噌工房やこんにやくづくりをしている、など。小さな村のなかでいろんな取り組みをしているんです。自分の特技を持ってやっている人たちがたくさんいるということなのです。今、若い人たちの話もできました。私の実家も専業農家で、米と牛をやっています。父と弟がやっているのですが、國博さんに大変お世話になっているのですが、弟は200頭の牛を一人でやっています。生き物を飼っていると365日休みはない。そうすると、外から来た若い人たちとつながりを持てるというような状況にはありません。入谷を踏んばって支えている若者は少ないながらもいるけれども、休みなしに働いている。かなりしんどい思いをしているなというのは、弟を見ても感じています。そこに、外から来た若い人たちとかと何とかつながっていけばいいなと弟と話をすることもありますが、そのあたりは大きな課題かなと思っています。博之さんも、國博さんも、見てくださっているので、よくよくご存じのことだと思います。彼らの余暇であるとか、収入面のことであるとか、それから子育てですね。入谷のみんなの一番大きな悩みは、地元の人たちに聞いても、とにかく食うことはできるし、この土地に住んでいて幸せに思う。けれども、自分の子どもを育てていくときに、遠くの学校にやるということがすごく大きく悩むし、金銭的にも大きな負担になっている。そういうことは一つ課題としては入谷のみならずあるかなと思います。

あともう一つ、入谷地区は文化財もいろいろあるのですが、古文書があります。例えば近世中期の文書に『入谷安倍物語り』などがあるのですが、それを見ていると、実はむらの人口自体は大きく変わっていないのです。500戸、全部屋号がついているので、誰がどの家か、江戸時代から続いている家々も分かります。入谷は古い時代から続いている自然村なのです。江戸時代中期と今のエリアでは、ほぼ人口規模が変わっていない。500戸で、大体1,800人、2,000人弱ぐらいの、小さなポリスという感じです。みんな顔見知りという、人間のサイズに合っている暮らしぶりです。入谷の背景の自然と人口のバランスが取れているのではないかと思います。そういうこともあって、このむらは続いてきたのかなと思っています。

ただ、人口構成がちょっと違って、子どもの数が少なく、年配の80代、90代、100歳代の人口が多い。人口自体は大きく変わっていないが、人口構成が変わっている。こうした人口構成の課題については、外から若い人たちが入ってきていたり、黎重さんのような地域づくりに取り組んでいる方々と、踏ん張っている地元の若い農業者たちとが連携し合っていくようなことで、ソフトランディングできるのではないかなと思っています。ですから、私は悲観していません。楽しいことがたくさん起きてきています。仙台から大体1時間半ぐらいで来れるこの距離、私自信が実験台みたいな形で今2拠点居住をやっていますが、ダーチャ、週末農業みたいな形でできる距離です。都市と農村をうまくつないでいくというふうな、ちょうどいい距離感のところに入谷はあるかなと思っています。しかも、海と山の暮らしが近接していて、何でもありますね。このむらを使わない手はないだろうというので、本当に自分たちで、この森-里-海の循環のなかで暮らすロールモデルをつくっていく。これからの農村はこうやっていこうということを、阿部ンジャーズのような先輩方や移住してきた若者の取り組み、私の弟のような地元の若者なども頑張って農業をやっていますので、あたらしい農村地域をつくっていききたいなということは思っています。よろしくお願いします。以上です。

○市田（コーディネーター） どうもありがとうございました。小谷さん、今までの話を聞いていらして、感想などはありますか。

○小谷（コメンテーター） ありがとうございます。やはり私が現地を訪ねて面白かったことの一つは入谷産直売所。資料にも書かれていますが、身の丈に合った、持続可能な産直という、本当に小さな古い建物で直売所を続けておられる。先ほどの忠義さんのプレゼンでも、活動実績、いろんな数字とか、金額とか、この8年ぐらい、劇的に増えてはいないが、減ってもいない、これはすごいことだなと思ったのですよね。むらづくりは、間違いなく、入り込み数とか、金額で測る成長産業ではないので、続いていることがすごいことです。入谷産直売所に補助金を出すから大きくしないかという話があったけれどはね除けたというのを聞いて、審査委員がみんな「おおっ」と、うなったのですが、それが本当の持続可能で、恐らく大きなファーマーズマーケットにしていたら、一時的な売り上げは上がったかもしれませんが、だんだんじいちゃん、ばあちゃんの高齢農家が「恐れ多くて。持っていくのも大変だ」みたいになって、寄り付かなくなり、張り合いを失う。だから、大きなファーマーズマーケットにしないという意識、それがすごく大事で、むしろ勝ち筋だと思ったわけですね。

やはり仕事はお金儲けだけではなくて、余り赤字が続くと難しいですが、損をしない程度に、毎年作った農産物を持っていく場所がある。そこに知り合いがいて、会話をして、元気にしてるか確かめる、いわゆる生存確認。まさに住民福祉と経済を全部兼ねているのがむらづくりで、その拠点が入谷産直売所だと思えば、本当にどんなデーサービスより元気なお年寄りが集まる拠点を自走してやっている、すごいことだなと思いました。

逆説的に言うと、そういうお年寄りが自分らしく生きていく地域には、若い人も、まさに農的暮らしを求めて、どうしても農水省も大規模化して、生産量を増やそうという動きが多い中で、人数が一人でも、田舎暮らしを楽しむ人がそこに1人増えるとか、あるいは出て行かずにとどまるということが大事で、おっしゃっていた住民満足度の高さ、それが今の言葉で言うレジリエンスなのですね。だから、スモール・イズ・ビューティフルといいますが、スモール・イズ・レジリエンス、小回りの効く拠点が実は強い、そういうことを体現されているのが入谷だと思いました。

○市田（コーディネーター） ありがとうございます。私も直売所を訪ねて同様の感想を持ちました。

残すところ、10分になってしましまして、わずかなのですが、会場のフロアの方々からご意見をいただきたいと思います。何でも結構ですので、挙手の上、よろしくお願ひします。どなたか、いらっしゃいませんか。今日は南三陸町の方々はずいぶん来られています、他県の方でももちろん結構です。

○会場 東北農政局の農村計画課の吉野と申します。パネルディスカッションと発表をありがとうございます。私から二つほど質問があります。

一つ、後ろの方にあります、左側の方にオクトパスがいるのですが、右側の方に3キャラほどいるのですが、これは一体どういうキャラというか、YES工房の際に何かつくられたものなのか、ちょっと気になりまして、お答えいただければなと思いますが、どうでしょうか。

○阿部（國）（天皇杯受賞者） 友達です。

○会場 ありがとうございます。もう1点なのですが、今後の入谷についての話なのですが、3月、4月と春になっていく中で、入谷は多分山に囲まれた中なので、たとえばクマとか、イノシシ、サルなどの鳥獣被害が今後も出てくるかと思うのです。そういった中でどういった対策をするのかがすごく気になりました。何かユニークな対策などがあれば、教えていただきたいなと思います。

○阿部（國）（天皇杯受賞者） 鳥獣被害は結構出ているというか、クマの直接被害は余りまだないのです。出ていることは出ています。ただ、イノシシの被害が最近はずごく増えています、今、行政といろいろ相談をしていますが、イノシシ対策として、去年までは個々にテープを貼ったり、一部には果樹園に電牧を張ったりというのはありましたが、田んぼの被害が去年からちょっと増えてきているなど。荒らされているのが随分あったりして、その辺を町、県、国のそれぞれの事業があれば、それを何とか入れて、電牧で囲ってしまおうかということの一部検討しているところです。予算の関係もありますので、すぐ「します」とはなかなか言えないのですが、それは検討せざるを得ないだろうなど。その対策としては今検討中です。

○阿部（博）（天皇杯受賞者） 私、鳥獣被害で考えていること、電牧を張ったりというのは当然のことなのですが、実は今月、私、宮城県なのですが、耕作放棄地の率と鳥獣被害の出現率が妙にリンクしているような気がして、わが町では歌津というところで最近毎日のように出ていたものですから、山合いの今まで畑だったところ、田んぼだったところで結構荒れている場所が多分あるだろうなと思ったときに、入谷はあれだけ広い農地がありながらも、クマの目撃情報はあっても1回か2回なのです。だから、いわゆる緩衝帯というのですか、農地と山との間にどれだけ人が入るかということ、それも結構大事なことだなと思います。どれだけ農業の現場に人がいて、整備、単純に言えば草刈りをどれだけまめにするかということが大事な要素になってくるのかなと思ってはいます。

○市田（コーディネーター） ありがとうございます。

○会場 貴重なお話をありがとうございました。福島県農村振興課の吉田と申します。お世話になっております。

お聞きしたいのは、先ほど阿部会長さん、阿部副会長さんからもありましたが、移住者がチャレンジしたいことを寛容に受け止める、失敗したっていいじゃないかというお話がありました。実際、地域づくり、私ももともと普及指導員で地域に入ったりしていたのですが、やはり失敗を許すということが非常に難しいのかなと思っております。先ほど山内先生から古文書の話もあったのですが、もともとこの入谷地区がそういったチャレンジ精神にあふれた地区であったのか、それとも皆さん阿部ンジャーズのような取り組みがあって、そういった機運が高まったり、空気感ができ上がったのかといったところ、もしおわかりになれば、教えていただければと思います。

○阿部（國）（天皇杯受賞者） チャレンジ精神というか、その辺はよそとそんなに変

わらないかなと思うのです。ただ、入谷地区の最初、今の南三陸町は四つの旧村、町が一緒になってでき上がっているわけですが、特徴的なところは海に面していないというところがあって、やはり農村地帯ということで、元々が農業で生業を立てていた地域だということ。その中で、昔から結の精神というか、相互扶助の精神がまずはすごい地域だということだと思います。一番は約 500戸ある戸数の中で、もともと葉たばこ養蚕、先ほど伊達藩の山内甚之丞、養蚕の祖と言われる方が入谷出身ということで、去年が生誕 330年なのですが、500戸のうち、かつては 350戸が葉たばこをやっていた。さらにほぼほぼ 300戸が養蚕に取り組んでいたという地域なのです。養蚕と葉たばこを一緒にやっていた。お米は、入谷地域で作られたお米はほぼほぼ入谷地域なり、志津川地区なり、歌津地区なり、町内でほとんど食べるぐらいしか作れなかった。耕作面積がなかった。食べて終わりみたいな。だから、お米は換金作物ではなかったというふうな地域なのです。あとはというと、冬場、出稼ぎがすごく多い。そういう地域の中でお互いが助け合わないと生活が成り立たないという中で、300年から続いてきたお祭も、お互いが協力し合いながらお祭を進めてきたという歴史がずっとあって、その辺の地域性というか、それぞれの家々が助け合って、共助の精神、相互扶助の精神のもとにずっと歴史を紡いできたという形があるかと思います。ですから、震災のときに移住者の皆さんが結構入ってきていますが、お互いに拒否しないというか、受け入れる。その中でお互いに協力するということに対して、よそから来た人も、もともといる人も分け隔てしない。

失敗することもあります。成功もするけれども、失敗のほうが多いと言いますが、失敗を失敗と思わなければいいのです。先ほども言いましたが、失敗したのは何が原因かというのが自分でわかれば、次、もう一回チャレンジできるわけですから、そういうふうな気持ちを持たせる。失敗を責めてはだめなのです。失敗した後、責めてしまうと、みんな意識してしまうので、出て行ってしまいます。失敗したら、もう一回頑張ってみよう、今度こうしたほうがいいんじゃないかというちょっとしたアドバイスを送ることが、副会長なんか、特に、自分も失敗していますが、失敗したものをアドバイスとして伝えているというのがすごく強いところかなと思います。そういう風土というか、そういう地域性があるところだなと思っています。

○山内（コメンテーター） ちょっと補足します。先ほど、忠義さんの資料に山内甚之丞の330周年と書かれてありました。昨年11月に330周年祭を開催しました。ご質問の回答を先にすると、江戸中期の時点で、入谷は「チャレンジ」精神が、風土としてあるという

お答えになります。先ほど、土地の狭い入谷はハンディキャップを抱えている、ということをお話ししたのですが、入谷村の文書を読むと江戸中期の時点で、すでに限界まで田んぼも畑も耕しており、集落全域から上る収量の限界値を把握しています。さらに、ヤマセによる冷害を起因とする凶作になると、むらの暮らしがかなり厳しくなるということはわかっているわけです。330年前に山内甚之丞が福島県の川俣へ養蚕の修行に出て、死に物狂いで新しい産業の導入に取り組みました。村総出でギャンブルをやった感じだと思います。大変な賭だったようです。こうして仙台藩に取り立てられ、その後、藩内の農家で養蚕の取り組みが拡大するということになりました。そういう風土が入谷にはあります。自分たちで工夫して、地域の産業興しをやっていくということ、それから自分たちの大事な田畑を耕していく、そこを守っていくということと、両輪でやってきた村かなというふうに思います。

○阿部（博）（天皇杯受賞者） 私が思っているのは、もしかして、あくまでも仮説なのですが、これにあるとおり、入谷地区というのは他の3地区より内陸にあったわけですね。歴史上、実は何度も三陸沿岸は津波が来ていまして、そのたびに多分無傷だった入谷が支える側に当初は回らざるをえなかった。あるいは今で言うボランティアのような人たちが入谷を通して浜に入っていったということも多分あるだろうし、そういった近くの浜を助けるために、入谷はしっかりしなければいけないんだ、そのためにはいろんなものを受け入れて、私たちがしっかりしないとだめなんだみたいな、どこかに親心のようなというか、何かそういうのが多分あったのではないかなというふうに思うのですよ。今のうちに、たとえばLINEとか、SNSで、すぐ呼びかけたりして来てもらえるような状況ではない中で、歩いて行ける距離でそういうことができたという入谷のポジションが、いわゆる許容力の深さにつながってきた要因の一つかなというふうに私は考えています。

○会場 ありがとうございます。お恥ずかしながら、山内甚之丞が伊達の人間だったということを福島県職員として知らずに恥ずかしい限りでございます。福島県も葉たばこと養蚕が盛んだったというところで非常に共感を得たところでもございますし、皆さんの結の精神、福島県にも大事にしている地区がたくさんありますので、今後ともその取り組みを参考にして私も仕事のほうに努めてまいりたいと思います。ありがとうございます。

○市田（コーディネーター） どうもありがとうございます。今日は、パネラーの方々をはじめ、貴重な話をありがとうございました。

私は昨年8月、南三陸町を初めて訪ねまして、震災の被害が甚大だった志津川地区を

拝見する機会がありました。震災のとき、最後まで庁舎に残って避難を呼びかけていた職員の方の話はニュースで知っていましたが、実際、庁舎を震災遺構として残されているのを見て、胸が詰まる思いがいたしました。入谷地区は震災の前から優れた活動をしてこられました。やはり震災が大きな契機になっていることを実感しました。辛い記憶だと思いますが、震災、津波の記憶や記録、言い伝えも含めて、これからも次世代に伝えていただきたいと切に願っております。今回の天皇杯受賞が皆様にとって励みになっていれば大変うれしいです。どうもありがとうございました。また、ご協力いただきました会場の皆様、どうもありがとうございました。これでシンポジウムを終わりにいたします。司会の方にお返ししますので、どうぞよろしく願いいたします。

○司会 演壇の皆様、有意義な意見交換をありがとうございました。また、会場からも積極的に参加していただきましたし、またオンラインの参加の方々も熱心にご視聴いただきました。まことにありがとうございました。それでは、以上をもちまして、優秀農林水産業者に係るシンポジウムを終了いたします。どうもありがとうございました。（拍手）

本日の結果は、後日、内容を整理した上でほぼ全文を当協会のホームページにアップいたしますので、今後の参考にしていただければと思います。また、配付資料にありますように、来月11日には農産・蚕糸部門のシンポジウムを山形県山形市で開催する予定です。こちらでもオンラインで視聴できますので、ご関心のある方はご参加いただければ幸いです。

なお、お帰りの際には、簡単なアンケート用紙をお配りしておりますので、ご記入の上、受付にお渡しいただくようお願いをいたします。オンラインの方々には、ズーム会議から退室されると、アンケートに回答する画面に切り替わりますので、ご回答をいただくように重ねてお願いをいたします。

本日は誠にありがとうございました。

（閉会）

令和7年度（第64回）農林水産祭
（第41回）「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」
（海と山の絆で苦難を超えて 次世代にしなやかにつなぐ）

発行 令和8年4月

編集・発行 公益財団法人 日本農林漁業振興会

〒104-0045

東京都中央区築地3-12-5 築地小山ビル4階

TEL (03) - 6441 - 0791 (代)

FAX (03) - 6441 - 0792

URL <http://www.affskk.jp>

本資料に掲載の記事、写真の無断転載を禁じます。

